

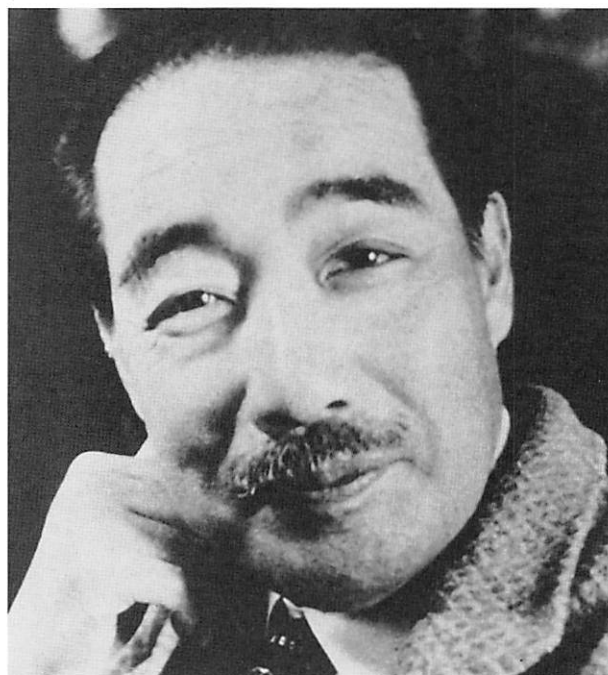
小池光・加藤治郎・花山多佳子・米川千嘉子  
鋭い四歌人が輪番で執筆する特別企画

# 20世紀歌人群像

## 7 北原白秋

花山多佳子

間もなく21世紀。  
近代短歌から現代短歌へ…  
短歌はこの100年でどのような足跡を残してきたのだろうか。  
24人の歌人にスポットをあてて20世紀の短歌を検証する。



### 第一章

### 人と時代

白秋は本名を北原隆吉、明治一八年一月二五日福岡県山門郡沖端村（現在の柳川市）に生まれた。北原家は九州地方で名を知られる海産物問屋の老舗で、父の代には酒造業を主としていた。幼時、虚弱であった隆吉は大家のトンカ・ジョン（大きい坊や）として、「びいどろ壺」のように大事に育てられた。柳河地方の異国情緒にみちた風景や物、放恣な人々の暮らしが、白秋の感覚や言語形成に与えた影響はきわめて大きい。

県立伝習館中学在学中に詩歌に親しむようになり、一六歳のときから「白秋」の号を使う。この年、沖端の大火で生家が焼け、家運が傾き始めた。明治三七年、一九歳のとき、父に隠れて上京、早稲田大学高等予科文科に入学。早大生の若山牧水と同宿する。三九年、新詩社の与謝野鉄幹、晶子を訪問、「明星」に詩や短歌をさかんに発表するようになる。一歳下の石川啄木とも知り合う。

四〇年、鉄幹、吉井勇、木下李太郎、平野万里と、天草、長崎など一か月間の、南蛮情緒探訪の旅をする。この年、森鷗外宅の「観潮楼歌会」に出席し、伊藤左千夫、斎藤茂吉らと知り合う。四一年、李太郎らと七名で新詩社を脱退、「明星」はこの年、廃刊された。脱退したメンバーは、若手の画家とともに「パンの会」を始める。

四二年、明星系の詩歌人による新雑誌「スバル」が創刊され、詩や短歌を発表。三月、第一詩集『邪宗門』刊行、エキゾチックで、官能的な新体詩は注目を集め、詩壇の地位を確立した。十月、木下李太郎と長田秀雄と三人で同人誌「屋上庭園」を創刊するも、翌年、



生家（現・福岡県柳川市）

白秋の詩「おかる勘平」によつて発禁処分となる。

四四年、詩集『思ひ出』

出版。上田敏の絶賛を受け、

世評もともに高かった。雑誌

『朱槿』を創刊。四五年、

もと隣家の妻、松下俊子との

姦通罪でその夫から告訴

され、二週間拘留されたの

ち、放免となる。この年、

父母、弟妹が破産した生家

を捨てて上京し、白秋のもと

に身を寄せる。石川啄木

が二七歳で世を去った。

大正二年一月、処女歌集『桐の花』出版。同年の斎藤茂吉の『赤光』とともに、画期的な歌集となった。夫と別れた俊子と再会、九月に結婚。一家を挙げて神奈川県三崎に移住する。詩集『東京景物詩及其他』を刊行。

三年、妻と小笠原父島に渡るが、数か月で帰京、俊子との生活に疲れ果てて、遂に離別する。三崎での生活は、この年の詩集『白金の独楽』、翌年の第二歌集『雲母集』の結実となった。

五年、江口章子と結婚して、千葉県東葛飾郡真間に住む。このころ短歌に没頭し、売り食いするほどの困窮生活であった。七年、小田原に転居。鈴木三重吉が創刊した児童文学雑誌『赤い鳥』に協力し、以後、数多くの童謡を書くようになる。九年、章子と離婚。十

年、佐藤菊子と結婚。長年刻苦推敲してきた歌集『雀の卵』をようやく出版した。

一三年、短歌雑誌『日光』を創刊。同人は、前田夕暮、釈迦空、

土岐善麿、木下利玄などで、当時の歌壇を制覇していたアララギに

対抗する超結社的なものであったが、維持が難しく、昭和二年に廃

刊した。昭和九年、歌集『白南風』出版。十年、短歌雑誌『多磨』

創刊。一二年ごろから視力に異常を覚え、失明に近い状態となる。

一四年、歌集『夢殿』刊。一五年、生前最後の歌集『黒檜』出版。

一七年、腎臓病、糖尿病が悪化し、五七歳で死去。没後に五冊の

詩、歌集が出版されている。

## 第二章

### 歌と時代

明治四一年、「明星」が廃刊され、三〇年代の詩歌の創成期は、終息した。四〇年代から大正初めにかけて、新世代の詩歌の昂揚はめざましく、まさに近代詩歌の青春の息吹きが漲った。短歌史上でも若山牧水、前田夕暮、石川啄木らの新風が目立ったが、特に大正二年に出版された斎藤茂吉の『赤光』、白秋の『桐の花』は、この時代のピークを記念する歌集といえよう。

『桐の花』は白秋二八歳の処女歌集であるが、すでに二四歳で『邪宗門』、二六歳で『思ひ出』の二冊の詩集を出版していて、詩壇の輝く星であった。三八年の上田敏の訳詩集『海潮音』の影響を受けた白秋は、異国情緒に満ちた圧倒的な言葉の駆使と悩ましい新感覚で、当時の詩の最先端に立っていた。『桐の花』はそういう詩人白秋のはじめての歌集だったのである。一人がさまざまな形式で表現を試みるのは、明治に共通の精神であるが、その最後にして最も多才に活

躍したのが白秋であった。「ことばの魔術師」といわれた白秋は、また、ジャンル（分類）それぞれの形式、調べというものに、きわめて敏感であった。白秋のうたは、明星風から出発して、詩のハイカラな語彙を取り入れつつ、『桐の花』では、詩とは異なった短歌としての独自の完成を達成している。短歌という容器に詩をそのまま盛り込んだわけではなかったのである。まず『桐の花』のうたから、その特色を見てみたい。

### 春の鳥な鳴きそあかかと外の面の草に日の入る夕

『桐の花』は「銀笛哀慕調」という、春夏秋冬の四季立ての構成からなる一連から始まるが、その「春」の冒頭の一首である。「春の鳥な鳴きそ鳴きそ」は、たとえば「思ひ出」では「鳴いそな鳴いそ春の鳥。／ネルのにほひか、酒の香か、／舟はゆくゆく、TONKA JOEZ／魔法つかひが金の夢。」「東京景物詩」では、「鳴きそな鳴きそ春の鳥、／昇菊の紺と銀との肩ぎぬに。」と、うたわれている。詩の方の小唄調は、歌では「春の鳥」を出だしに据えて「な鳴きそ」に正すことによって払拭されている。下句の対応は詩とは全く違って、奔放に言葉は流れず、一首として完結するように選ばれている。それによって、春の夕というもののせつない情感のみを純粹にさしだす名歌となった。

ちなみに、茂吉の『赤光』の冒頭歌は「ひた走るわが道暗ししんしんと堪へかねたるわが道くらし」で、師の左千夫死去の知らせに駆け付ける連作の一首。その場面を背景とした「わが道」の主観の強さと、白秋の完結した春の情緒は、きわめて対照的である。

### 手にとれば桐の反射の薄青き新聞紙こそ泣かまほしけれ

『桐の花』に取り入れられた新しい語彙は多い。「パノラマ」「ハモニカ」「サラダ」「色鉛筆」「石鹼」「羽毛襟巻」、花でも「ヒヤシンス」「芥子」「勿忘草」「連理草」「チキタリス」など、洒落たハイカラな物の名がまず目を驚かす。「ふくらなる羽毛襟巻のにほひを新らしむ十一月の朝のあひびき」など、全く外国映画の恋愛のようだが、けれども詩のような、刺激的な過剰な言葉や表現は持ち込まれていない。「反射」「新聞紙」は斬新だが、「こそ泣かまほしけれ」という王朝文体によって、あえてつつましく、はかなくうたわれている。

### 君かへす朝の舗石さくさくと雪よ林檎の香のごとくふれ

現代まで最も人気のあるうたの一つだろう。「君かへす朝」という恋愛場面をすつと出して、「さくさくと」から「雪よ」に転じ、「ふれ」にかかる「林檎の香のごとく」の比喩の新鮮さ、まさに短歌の青春時代の生んだ珠玉の作品といつていい。

このうたも『東京景物詩』に同じフレーズを持つ詩がある。「雨……雨……雨……／雨は銀座に新らしく／しみじみとふる、さくさくと、／かたい林檎の香のごとく、／舗石の上、雪の上。」というので、銀座の情緒をやや散漫に撒き散らした詩の一節になっている。これをうたにする際の見事な変え方に、白秋の、形式の違いに対する認識がはっきり出ている。

「短歌は一箇の小さい緑の古宝玉である、古い悲哀時代のセンチメ



白秋（昭和7年ごろ、東京・世田谷）

ントの精である。「私の詩が色彩の強い印象派の油絵ならば私の歌はその裏面にかすかに動いてゐるテレピン油のしめりであらねばならぬ。」と、『桐の花』のはじめに付された文章「桐の花とカステラ」の中で、白秋は述べているが、この短歌観による一つの完結体である『桐の花』の世界を壊すために、相当の苦心をすることになる。第二歌集『雲母集』は、全く異なった作風を持つ。

も **大きな手があらはれて昼深し上から卵をつかみけるか**  
『雲母集』

冒頭の「新生」より。テリケートな都会的情調は消え失せて、「手」と「卵」のみの世界が出現している。歌に大きく力強いものを求める欲求が顕著だ。「けるかも」の万葉調も、『桐の花』に見られない『雲母集』の特徴である。姦通事件という「身の一大事」を経て、流離してきた三浦三崎での海辺の生活の所産でもあるが、近代短歌

が目指す方向も大きく作用したに違いない。

『桐の花』は世に賛嘆されると同時に「人間味や生命の燃焼が乏しい」という批判があった。これは、同年の茂吉の『赤光』と否応なく対比されたもので、新時代の短歌として『赤光』の与えた衝撃と影響は、ずっと大きかったのである。白秋もまた急速に全身的表现へと移行した。

三日の月ほそくきらめく黍畑黍は黍とし目の醒めてあつ

『雲母集』

全体には性急に力みすぎた『雲母集』だが、このうたは白秋の良さが息づいている。「黍は黍とし」と対象の生命に純粹に感応する。いわば忘我で、自分の心理をのぞき込んだり、表白したりというのではない。自然や、植物、雀、子供の一つ一つに驚き、震えるほど感動する。「ほのかなる人の言葉に触りたれば驚くものか黍は小夜ふけ」とも詠むが、どちらも主人公は黍なのである。

ぼつぼつと雀出て来る残り風二百二十日の夕空晴れて

『雀の卵』

白秋はしょっちゅう引越しては、めぐりの自然に夢中になり、次第に自然観照歌に洗練と深みをみせてゆく。当時、歌壇はアララギの全盛期をむかえていたが、アララギの自然詠と違うのは、人生や生活を投影していないことである。自然の清しさの方が自分に反映する。それで無思想とか、深刻さが無いといわれてしまう。しかし、このうたのような、明るさ、風通しの良さはどうだろう。白秋の童謡を思い起こさせる、口語調のいきいきとしたうたである。

## 聴耳に胡桃食みる影我は坐る太尾の栗鼠にかも似る

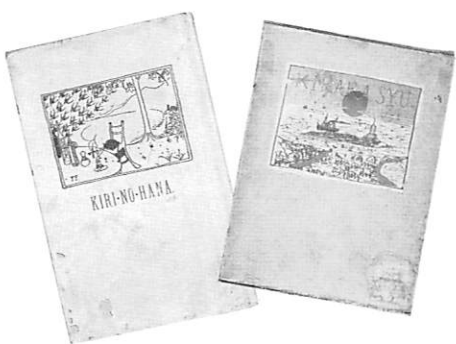
『黒檜』

晩年近く、白秋は視力を次第に失い、ほとんど失明に到る。「黒檜」は「照る月の冷さだかなるあかり戸に眼は凝らしつつ盲目ひてゆくなり」などの絶唱を含み、薄明に感覚を澄ました、沁み入るような自然の歌が多い。その中でこのうたは、自分の姿をユーモラスに言っていて、悲哀がある。「聴耳に」「太尾の」と、言葉好きの白秋の語感が躍如としている。「私は寧ろ現在の境遇に於て幸せられてゐる」と後書きに記す白秋であった。

### 第三章

#### 短歌史におけるポジション

明治の後半、西欧化が進むにつれて、短歌という短い伝統の形式で、新時代の個の表現が可能かどうか、という議論がおこってくる。尾上柴舟の「短歌滅亡私論」(四三年)の、これからは散文の時代、とする論文に、その端緒が見られる。



歌集、左、「桐の花」・右、「雲母集」

短歌でいかに個としての自我を表現するか、が、近代短歌の目指す方向であった。作者の顔が見え、作者の人生態度が背後にうかがえる歌が、連作や歌集を通して追求される時代になっていく。そうした流れの中で、白秋の『桐の花』は、逆の方向での一つの完成であった。一首の短歌として、形式が

要求するものだけを、さしだそうとしたのである。そこに見えるのは、白秋個人の感情や心理ではなく、言葉でつくられた「センチメントの精」であり、感覚そのものであり、音楽である。言葉は新しいが、古典的といっている。大正四年ごろまでは、さまざまな傾向がまだ混在して、影響を与えあっていた歌壇も、その後、アララギ派が完全に主流となるに従って、白秋の立場は弱くなっていった。全身の集中、人生の寂寥相、重厚、沈潜といった島木赤彦のテーゼ(命題)の前に、白秋の掲げた「新幽玄」は、技巧のみの軽いものと見られがちだった。こういう評価は後々まで回復されているとは言い難い。歌に重い意味や、人生の感慨を貼り付けさせるのは、現代短歌でも、底流をなす姿勢なのである。

白秋は、日本の明治から大正という時代の生んだ、日本人ばなれのしたタイプの天才だったように思う。詩、短歌、童謡、流行歌、歌謡、いずれもその形式を生かす方法で書いたし、駆使する言葉も、西欧、江戸時代、古典に渉り、造語新語もふんだんにある。その言語感覚の良さ、豊かさは、現代までちょっと並ぶ人はいない。高踏的難解から、俗な愛唱性まで、というのもめずらしい。自我よりも、言葉や外界が大好きで、心はそちらに向かつて、いつもひたむきに全開なのだ。生活形態もシンプルにそのためのみある。純粋な文学活動のために雑誌を発刊して、その存続にはこだわらない。短歌史上では孤立的で、継承し難いタイプと言えよう。

しかし、現在、韻文というものの、韻文としての短歌の良さを顧みるなら、白秋は郷愁だけではない指針をあたえてくれるはずである。

(はなやま・たかこ 「塔」会員)

\*次号は斎藤茂吉(小池光筆)です。